親愛なる真祖様へ

ラウラ&シャル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

親愛なる真祖様へ

【Ｎコード】

Ｎ１０２５Ｙ

【作者名】

ラウラ＆シャル

【あらすじ】

禁忌とされる人間と吸血鬼の真祖との恋愛、決して交わることのない二つの種族が交わり悲劇が起きた…真祖であるレインは最愛の人を、人間であるキティ（エヴァンジェリン）は命を失った、彼女と共に眠っていたのだがある日、目を覚ますと、試験管の中に入れられていた…

悲劇（前書き）

シャル&ラウラ「とにかく頑張ります」

シャル「つまんないよ」

ラウラ「つまらんな」

シャル&ラウラ「酷くないかい！」

悲劇

やめろ、やめてくれ！
そいつは関係ないんだ！
そんなことをしたら死んでしまう！
僕の言葉を聞こうとはしない村の皆、どうして？どうしてなんだ！
あんなに優しかった皆が僕の目の前で大切な人を殺している…

村長「どうして？どうしてだと！私達はただ怯えていただけだ！お前達の様な化物にな！」

???「私に構わず逃げて…」

???「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

少年の叫びでその日村は消え去った…少年の手の中で冷たくなっていく愛しい人…

少年「頼む死なないでくれ！」

???「あなたは生きて私の分まで精一杯生きて幸せになってね」

少年「君がいないと意味がない！だから頼む！死なないでくれ」

???「それは無理よ、私と貴方では生きる時が違うのですもの…愛してるわ、レイン」

レイン「愛してる、頼む死なないでく…れ」

???「……」

レイン「キティーーーー」

彼女はレインの手の中で幸せ想に息を引き取った…

レインは彼女を連れて教会に向かった…そう、彼達が式を挙げようとした教会へ…

ぎ、ぎぃぃ

壊れかけた扉が重く開く、誰もいない静けさに穴の開いた天井から漏れ出す月明かり、美しく幻想的な瞬間だがレインに楽しむ時間は残っていなかった…

レイン「絶対に守るって言ったのにごめんよキティ」

レインは涙をこぼしながら冷たくなったキティにキスをする、ほんの秒の行為ではあるが彼にとっては大切な数秒なのだ…

彼は守れなかったもどかしさと彼女との大切な記憶を忘れない為に長い長い眠りにつく事を決めた、だが、彼は知らなかった、彼がキスの際に流した一滴の血がどんな意味を成すのかを…

悲劇（後書き）

感想＆アドバイスお待ちしています

歳月を経て（前書き）

一夏たちの登場にしばらくかかります

歳月を経て

１０００年後…
　真祖のレインにとっての１０００年という年月は星の感覚と一緒でほんの一瞬だった…目覚めた彼は罪悪感でいっぱいだった…

レイン「ごめん、ごめん、ごめん、ごめん…」

何回、何十回、何百回と彼は誤り続けた…

ふと彼は思う、ここはどこだ？

僕は確か眠っていたはずなのに…彼が目覚めたのは見覚えがある教会ではなく、試験管の中に裸で浮いていた…

しばらくすると、白衣を着た人たちが現れて何やら喜んでいる…彼は何に喜んでいるのかは解らなかったがただ一言言えるのは、彼らの行動はレインにとって不快でしかなかったのだ…

レイン「あ、ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

レインが叫ぶと試験管にヒビが入り始めた、少し力を知れて叩き割る…

レイン「我の眠りを妨げたのはお前たちか？」

白衣を着た人たちは震えながら否定をする…

レイン「誰であろうと関係ない、貴様たちが居なければ彼女は、キ

ティは死なずに済んだのに！」

八つ当たりにも等しい感情と彼女を失った悲しみが暴走し始めている…

研究者Ａ「この化物がぁ！」

チャキ…

拳銃を向けて発砲する…

レイン「我にそんなものはききはせん！」

そう言い放ち、レインは自分の右手に力を込めた、すると彼の爪の先から血が滲みだし細長く鋭い刃状に変化する…

レイン「はぁぁぁぁぁぁ」

弾丸を切り裂き彼はまた多くの人の命を奪った…

廃墟と化した研究所で彼はまた、眠りに付いた…

翌日…

外に出ようと彷徨っていると

レイン「なんか着るものはないか…」

昨日のまま寝たため裸であるレイン、近くを探すとローブと試験管に保管されている銀色の手鏡を見つけた真祖であるレインにとって

は弱点である銀、大蒜、十字架などは関係ない、普段気にも留めないレインだがこの時だけは違っていた、

レイン「どうして試験管の中に手鏡が？」

不思議に思い試験管から手鏡を出してみると、

鏡「…つ…た…」

レイン「何か聞こえる」

鏡「やっと見つけた！」

レイン「！？」

鏡からの声を聴いたレインを光が照らした出した…

レイン「な！」

光が収まるとレインの姿が鏡に映りだす…

レイン「なにこれ？」

そこには、黒くボロボロのマントを羽織ったレインの姿だった、

レイン「どうなってんだ？」

少し混乱しているレインに対して、

鏡「やっと見つけたっすよ！僕の親方様！」

いつの間にか手に持っていたはずの鏡が首からぶら下っている…

鏡「よろしく頼むッすよ「！親方様！」

喋る鏡に困惑するレイン…

（捨てるか…）

鏡「えっ！ちょっと親方様酷いっすよ！」

レイン「僕は鏡に慕われるほどの知り合いは居ないもんでね…」

鏡「じゃぁ、これから宜しくってことで」

レイン「僕に関わると碌なとこ無いよ」

鏡「でも、もうフィッティング始まってるっすよ！」

レイン「フィッティングって何さ？」

鏡「僕はＩＳっすから親方様に適した武装と適した機体にならないといけないんす」

レイン「ＩＳ？」

鏡「ＩＳを知らないんっすか！」

レインは１０００年眠っていたこと&自分の正体を教える

鏡「そんなすごい人のＩＳになれるなんて光栄っす」

レイン「そんなにいいものじゃないよ」

今まで忘れていた悲しみを再度思い出すレイン、そんな時だった…

カツン…

レイン「誰だ！」

???「ドイツ軍だここを閉鎖す…る…これはお前がやったのか？」

（軍人が何でこんなとこにいるんだ）

鏡「多分、親方と僕の回収っすね」

レイン「なるほど…確かにこれをやったのは我だが？それが何か？」

???「何故皆殺しにした？」

レイン「我は今まで眠っていたのだ、それを妨げたものに罰を与えただけだが？」

???「貴様は神にでもなったつもりか？」

レイン「神？まさかその逆だよ…僕は死神だ…貴様も死んでみるか？」

???「あいにく死ぬ予定はないのでな」

仕方ないか…

レイン「主として命ずる我を全力でサポートせよ！」

鏡「了解っす親方様！」

こうして軍人との戦闘が始まった

歳月を経て（後書き）

感想＆アドバイスください
マジで！！

人物設定（前書き）

名前の通りだよ

人物設定

レイン

性別；男

年齢；役２０００歳位？

属性；吸血鬼：真祖

身長１７５．６

体重４９．８

見た目；不死のため１５歳で成長が止まる

髪色：黒

瞳；黄色

※　真祖の能力発同時に紅くなる

体系；筋肉質ではなく、かと言って太っている訳でもい

ＩＳ

名前；ウェンディ

待機形態；手鏡

色；待機；銀

稼働時；黒

武装；ブラッティ・クロウ（血の刃）

※真祖の能力の一つで自分の血を自由な硬さ、長さ、大きさにできる

チェイン・バインド（束縛の鎖）
ウェンディの武器
※背中のウィング・スラスターから出る黒い鎖、相手の行動を止める

ブラティーダガー（無限の刃）
※ウェンディ&レインの混合技で、背中のウィング・スラスターから無数の黒いナイフが飛んでくる（軌道変更可能）

エヴァンジェリン，A，K，マクダウェル（故人？）

性別：女

年齢：１８歳

属性：人間

身長：１５５．３
体重：???

髪色：金
瞳：青
体系：バランスのとれたスタイル（ご想像にお任せいたします）

人物設定（後書き）

ネタバレしますが、エヴァちゃんは死んでいませんよ

戦いを経て（前書き）

軍人の謎が明らかに？

戦いを経て

レイン「主として命ずる我を全力でサポートせよ！」

ウェンディ「相手の武装は刀一本っすよ親方様」

レイン「了解だ、さて、血の刃発動！」

レインは長さ６０ｃｍ位の刃を作り出した…

軍人「！！」

軍人はレインの一連の動作に若干驚いているが目は冷静に物事をとらえていた…

しばし、互いを睨み合い先に動いたのはレインだった

レイン「はぁぁぁぁ」

軍人「ふん」

血の刃と打ち鉄の刃が火花を散らす…

軍人「戦闘には慣れているようだが、刀の使い方は私のほうが上だ！」

レインの血の刃がいなされて、レインがよろめく…

軍人「もらった！！」

軍人が横に横一線に切る…が

軍人「手ごたえがない…だと」

レイン「我を誰だと思っているのだ？我はバンパイアの王であるぞ、貴様の五感を少し狂わせることなど造作もないのだよ」

軍人「な…に」

（…やられる…すまない一夏）

その時だった…レインに悲しむキティの姿が浮かび上がった…

軍人の首が少し切れ数滴の血が垂れる…

軍人「何故止める？」

ウェンディ「どうしたんっすか！親方様」

レイン「こんなことをしてもキティは喜ばないし、帰っても来ない…」

レインから涙がこぼれる…

レイン「貴様の名前を問おう」

軍人「千冬…織斑千冬だ…」

レイン「僕の名前はレイン…レイン，A，K，マクダウェル…で、

こいつが…」

ウェンディ「ウェンディっす！よろすくっす！」

千冬「ＩＳが対話しただと！」

ウェンディ「確かに僕はＩＳだけど人口知能搭載型っす」

千冬「成程な…此処で研究をしていたバカどもがお前を作っていたのだな」

だが、あることに気付く…なぜレインがいる？

千冬「レインは何でここにいたんだ？」

どうしてだろう？人間は嫌いなのに、彼女は信用してもいいような気がする…

レイン「驚かない？」

千冬「お前との戦闘能力はすごいことが分かったし、お前は男だ、男がＩＳを動かしている時点で驚いているよ」

レイン「じゃぁ、先ず初めに僕は人間じゃない…バンパイヤつまり、吸血鬼で真祖にあたる種族だ…」

千冬「バンパイア…か、本物か？」

レイン「千冬、ＩＳの刀を貸してくれないか？」

千冬「どうしてだ？」

レイン「証拠を見せるよ…」

レインはそう言い千冬から刀を借りると徐に自分の腕を切り落とした…

ウェンディ「え…何してんすか！親方様！速く止血を！」

千冬「何している！馬鹿者！死んでいまう…ぞ…」

千冬はあることに気が付いたレインから血が出ていないことを…

レイン「それでもってこの切れた腕を…」

レインは徐に切れた腕を切れた断面にくっ付けた…

しゅぅぅぅぅ…

湯気のようなものが立ち込めると同時に

レイン「ほらね？」

切れたはずの腕がくっついている…

千冬「な！」

千冬は驚きを隠せないでいた…

レイン「それと…吸血鬼の弱点知ってる？」

千冬「確か銀の武器に十字架、大蒜だったよな？」

レイン「真祖の僕にはそれが効かないし、吸血衝動もない、比較的、人間に近いが、限りなく人間ではない化物さ…」

千冬にはなんだか寂しげなレインの姿が目に移ってしまった…

戦いを経て（後書き）

そろそろ、感想が欲しいな

最愛の人（前書き）

やっとヒロインの登場！！

最愛の人

なんて悲しい目をしているのだこいつは…

千冬「さぁ、外に出るとするか、お前も来るだろ？」

レイン「あぁ、わかった」

千冬と一緒に外に向かう…

ウェンディ「親方様！入口近くに生命反応があるっすよ！敵かもしれないっす！」

レインと千冬はお互いにＩＳを起動させて戦闘態勢に入る…その時だった、前方に人影が現れた…

レイン「二人か…」

千冬「片方は私が相手をしようか？」

レイン「宜しく頼むよ」

人影はだんだん近づいてくる…

レイン（にしても、あの人影、異様に身長の差があるような？）

その時だった…先に動いたのは相手だった…

千冬「ふん、なめられたものだな、こいつの相手は

私がやろう、もう片方は任せたぞ」

千冬の相手を見る…エメラルド色の髪と瞳、人形を思わせる視線の女性がいた…

レイン「千冬、大…」

そう言いかけた時もう片方の人影が間合いを詰めてレインを襲う…

レイン「ぐ…」

???「戦闘中に相手の心配か？そのまえに自分の心配をしろ命取りになるぞ？」

レイン「なめるな！」

相手は少し距離をとる…

その瞬間、改めて相手の顔を確かめるレイン…

レイン「え…」

あまりの出来事に言葉を失う…

レイン「何で…どうして…」

敵を前に涙を流してしまうレインを見た敵は…

???「敵を前に感情を表に出すなど貴様は…」

お互いに動きが止まってしまう…

数分後…

未だにお互いが起きている状況が判断できていないのか、千冬たちの戦闘を横目に、お互い動けないでいた…

レイン「本当にキティなのか…」

最初に言葉を発したのはレインだった…

???「本当にレインなのか?」

レイン「あの時死んだ君がどうしてここに居るんだ…」

レインの心は罪悪感で一杯になった…

キティ「茶々丸、やめろ!」

レイン「千冬、一旦引いてくれ…」

茶々丸「了解ですマスター」

キティーの命令を聞き攻撃をやめた…

千冬「一体どうしたというのだ!敵の前だぞ!」

千冬も一旦距離をとる…

レイン「会いたかった!」

キティに駆け寄るレイン…

キティー「私も会いたかった！」

その声に答えるように駆け寄るキティ…

二人が重なり合う瞬間に悲劇は起こった…

???「化物…め…死ね！」

全員死んだと思われていた研究員がまだ生きていたのだ…

キティ「レイン！危ない！」

たぁぁぁん…

レインを庇うように代わりに銃弾を受けるキティ…

レイン「キティ？…」

倒れているキティを起こそうとしたレインの手に生暖かい液体が零れる…

レイン「あ、ぁぁぁぁぁぁ…」

レインからどす黒いオーラが出始める…

千冬「！レイン落ち着け！自分を見失いな！」

千冬の言葉も虚しく黒いオーラに包まれるレイン…

茶々丸はキティの傍で待機している…

レインは自分の感情をとうとう、抑えきれなくなって…

…暴走した…千年前と同じように…

ウィンディ「お、親方様！落ち着くっすよ！」

レイン「……滅べ！！」

レインが発した言葉に殺気がこもる…

レイン「無限の刃！発動ぉぉぉぉぉ」

キティを撃ったa研究員を滅多刺すにするレイン…その目からは、一筋の赤い涙が零れた…

???「まったく、世話のかかる旦那だよアイツは…」

茶々丸「お目覚めですか、アスター？」

茶々丸が待っていたかのように返答する…

キティ「おい！お前、彼奴を止めたいのだが、協力しろ！」

キティが千冬に問いかける…

千冬「お前、大丈夫なのか！」

キティ「気にするな…私も吸血鬼だ」

千冬「！まぁ、確かにあのままにしておくと不味いな…良いだろう、協力しよう」

キティ「茶々丸と一緒に奴気を全力で引け」

茶々丸「了解しました、マスター」

千冬「分かった…で、お前はどうする？」

キティ「あの馬鹿（旦那）を止めるさ…全力で」

茶々丸「来ます！」

レインは血の刃を両手で形成をして、千冬に切りかかる…

ッチ…

刃と刀が交わり火花を散らす…

千冬「甘い！」

千冬は茶々丸の方に押し返す…

茶々丸「…はぁ…」

茶々丸からりけっとデコピンが飛び出す…

その時、ウェンディが輝きだす…

光にレインがよろめく、すると同時にレインからウェンディが離れたかと思うと赤髪で赤い瞳の見た目１５歳位の女の子が現れたのだ…

ウェンディ「ふぅ、第二形態の移行完了っす」

千冬「！」

戦闘中にもかかわらず千冬は驚愕する、何せＩＳを使って半日しかたっていないのに第二形態になったからである…

ウェンディ「今のうちっす！親方様は血の刃しか使えないっす」

その言葉に反応して茶々丸と千冬が畳掛ける…

千冬「はぁぁ」

茶々丸「…失礼します…」

千冬の剣技と茶々丸もデコピンでレインがよろめく、よろめいた先にいたのはキティだった…

キティ「まったく、沢のかかる旦那だよお前は…」

ちゅ…

レインとキティは口付をする…ほんの数秒の行為だが、次第にレインから出ていた黒いオーラが消えていく…

完全にオーラが消えたところで唇を離すキティ…

そのには、満足そうな顔のキティなキティに対して気絶をしている
レインの姿があった…

最愛の人（後書き）

武器とワンオフアビリティ考えないとなぁ

感想お待ちしています

後…アドバイスもね…

別れ（前書き）

反省

誤字が多しぎること深く反省しています。

りけっとデコピン＝ロケットデコピンです。

別れ

そのには、満足そうな顔をしたキティと気絶をしているレインの姿があった。

数時間後…

レイン「ん？」

キティ「やっと起きたか」

レイン「！」

状況が解らないレインに対して

キティ「ん？何を驚いて居るのだ？」

レイン「大丈夫なのか！」

心配するレインに対して、平然としているキティ

状況に若干混乱しているレイン…

キティ「落ち着け、レイン」

レイン、混乱中…

キティ「落ち着け」

レイン、混乱中…

キティ「……茶々丸」

茶々丸「はい、マスター」

キティーの命令でレインのもとによる茶々丸…

茶々丸「失礼します…」

レイン「ん？」

ごっ！

レイン「……」

パタリ…

茶々丸からのロケットデコピンをくらうレイン…

キティ「誰がロケットデコピンスロット言った！」

茶々丸に突っ込むキティであった…

数分後…

レイン「ん？」

デコを抑えて再び生還したレイン…（いや、死んでないし！ｂｙレイン）

キティ「さて、状況を説明する前に私のことを説明するか」

１０００年前…

キティ「お前は覚えていないだろうが教会でキスをしたときにはまだ、虫の息であったが、意識は確かにあった、それで、お前が流した一滴の血を飲んだ…それが始まりだった…」

レイン「…ごめん、キティ」

謝るレイン…

キティ「何故謝る？お前のおかげで生きることができた、むしろ感謝しているのだぞ？」

レイン「君を守れなかった…」

謝るレインに優しく抱きしめるキティ…

キティ「馬鹿だな、私はまたお前を愛せる、お前も私を愛せるそれで満足じゃないか／／／」

涙が止まらないレイン…

キティ「私のために怒って、泣いてくれてありがとう／／／」

レイン「愛しているキティ／／」

キティ「私もだよ。レイン」

ウェンディ&茶々丸「「お取込み中悪いんすけど…」そろそろ、離れたほうが宜しいかと」

今の状況に気付き二人…

レイン「／／／」

キティ「／／／」

無言になる二人…

千冬「そろそろ、ドイツ軍が来るが、お前たちはどうする？保護することも可能だが？」

レイン「ありがとう、千冬、でも僕らはしばらく旅に出るよ二人で…」

そういって、歩き出す二人…

千冬「そうか分かった、ではまた機会があればな…」

二人とは逆に歩き出す千冬…

レインたちが千冬に再開するのはこう少し先のお話…

別れ（後書き）

次、原作に入ります。

感想お待ちしています

出会い（前書き）

やっと原作ルートに入れる

出会い

日本

？？？「取り敢えず、全員揃ってますねー。それじゃぁＳＨＲを始めますよぉ」

黒板の前でにっこりとほほ笑む女性、見た目は中学生、姿は大人？どっかの少年探偵も驚くほど大人に見えない…

そんなことを考えているのはこの物語の元、主人公の…

山田「…くん…織斑一夏君！」

一夏「はっはい！」

何とも頼りなくて女心もわからないヘタｒｅ…

千冬「言いすぎだぞ作者…」

し、失礼しました…くそ何故だ！何故俺（作者）の声が解るのだ？

千冬「お前の声を考えはダダ漏れだから…な！」

バコ！

痛ーーーー！あれはかの有名な妖本、出席簿！てか、何で俺に物理ダメージが聞くわけ？ま、まさか覇気使い！

千冬「誰がチートの化物だ！」

ゴッ！

そこまで言ってない…

千冬「それと、何時まで私は独り言を言っていればいいのだ？」

もう少し我慢してください…

視点を変えて教室に戻り…

山田「あ、大声出しちゃってごめんね、怒ってる？怒ってるよね？ごめんなさい…でも、自己紹介で「あ」から始まって次は「お」で織斑君の番なんだよね、だからごめんね、自己紹介してくれるかな？」

一夏「そんなに謝ら…って、泣かないで下さいよ（汗）」

貴方の弟さん、先生泣しちゃいましたよ？

千冬「大丈夫だ、彼らが来れば、これの、角で調教してやるとするか」

えっと。死んじゃいますよ？

千冬「大丈夫だ、心配ない、アイツは丈夫だからな」

何だかんだ言ってるうちにレイン夫婦到着…

レイン「元気そうだな、千冬」

キティ「だから言ったろ？こいつは元気だけが取り柄…みたいな…」

そう言いかけたキティに妖本が降りかかる…

バシ！

キティ「にゃ！」

何とも可愛らしい悲鳴を上げるキティ

レイン「作者…お痛が過ぎると…殺すぞ！」

だから何で俺の声が聞こえるんだよ！

千冬「それより、ようこそＩＳ学園にルーマニア代表のレインとエヴァンジェリン」

時間は一週間前に遡る…

旅を終えたレイン達ご一考はルーマニアに腰を落ち着かせていた…

キティ「お前は適正どうだった？」

レイン「ＡＡ＋ってとこかな、お前は？」

キティ「ＡＡだった」

レイン「まあまあだな」

あのう、レインさんA判定超えてんのに、まあまあって、あんた…by作者

レイン「これで、ルーマニア代表は俺たちで決まりだな」

キティ「そうだな」

笑顔で話している二人をしり目に…

ウェンディ「幸せそうっすね」

茶々丸「そのようですね」

ウェンディ「どうもっす、最近影が薄くなりがちなウェンディと…」

茶々丸「マスターのIS茶々丸です。以後お見知りおきを」

えっと、誰に言ってるんですか？

ウェンディ「こうでもしないと出番が無くなる気がするんすよ！」

茶々丸「そうですよ、マスター達はISがなくても生身で勝てるほどの戦闘力なので、私たちは不要ですよ…悲しいことに」

っちょ、泣かないで下さいよ（汗）私が泣かしたみたいじゃないですか（汗）

キティ「おい！貴様何をしている！」

うん、死んだねこれ…

レイン「この子達を泣かせたね…」

いやぁぁぁぁぁ…

ウェンディ「違うんすよ…」

茶々丸「私たちは不要品として捨てられないか心配で…」

涙を浮かべるウェンディと茶々丸…

レイン「捨てる訳ないじゃないか」

キティ「そうだぞ、茶々丸、私達はお前たちを捨てたりはしない」

涙を流すＩＳたち…

うん、感動するねって、俺、殺れぞんかよ！

ウェンディ「あ、レインなんかＩＳ学園の織斑千冬からメッセージが来てる見たいっすよ？」

茶々丸「私たちにもです。マスター」

レイン「千冬か、懐かしい名前を聞いたな」

キティ「そうだな」

ウェンディ「レインたちは千冬に結構大きな貸があるっすね」
レインの暴走をキティ達と協力し止めた千冬、今のレインたちが居るのは彼女のおかげといえる…
レイン「で、内容は？」
ウェンディ「ＩＳ学園の入学案内だそうっすよ」
少し考え込むレイン…
茶々丸「マスター上からのメッセージです」
キティ「内容は？」
茶々丸「ＩＳ学園に入学及び旦那の説得…だそうです」
レインは少しは人間嫌いは治ったものの、未だに嫌いである…
レイン「大勢いるんだろ？」
ウェンディ「しかも、レインを入れて、男二人っす」
レインはいまだに考えている…
キティ「私も行くのだ、大丈夫でだろ？」
キティの言葉に折れたのか、渋々

レイン「仕方ない行く…K…」

言いかけたレインに首筋に刃物が…

キティ「そう言えば男は二人だけと言っていたな？」

茶々丸「そのようです」

キティ「浮気したら…な」

レインに笑顔を向ける…

レイン「えっと、顔が笑っていないんですけど…」

その笑顔を見て顔が引きつるレイン…

レインはこの時に誓う…

（絶対に浮気はしない…してはいけない）

ウェンディ「姉さん怖いっすね…」

レイン「そうだね…」

キティに聞こえないように喋る二人…

で時は戻りＩＳ学園前

千冬「では教室に行こうか」

教室に先導する千冬…

レイン「ちょっと待ってくれ。ウェンディ」

ウェンディ「了解っす」

レインの掛け声を待っていたかのように返事をするウェンディ…

ジャラジャラ…

レインの体を束縛の鎖で拘束する…

千冬「何をしている？」

行動に疑問を隠せない千冬…

キティ「アイツはああでもしないと殺気や真祖の能力に制限がかからないんだよ、それとも入った瞬間に全員気絶してもいいなら別だがな」

千冬「前よりのパワーアップしているってことか？」

茶々丸「前にお会いした時より、格段に上がっています」

説明をする茶々丸をしり目に…

千冬「そうだ、今度、手合せ願いたいのだが？」

まったく、このバトルジャンキーがめが、こっちの大変さを考えろよ！戦闘シーン考えるのにどんだけ苦労するのかわかって…

千冬「それとも想像主様じきじきに相手してくれるのかな？」

喜んで書かせていただきます！ですからその危ない、凶器を振りかざさないでください、お願いします！ｂｙ作者

千冬「初めからそう言えばいいのだ」

なして！なして、作者なのに立場や肩身の狭い思いしなきゃいけないのですか？

千冬「そういえば、どうしてお前達は代表になったのだ？人間嫌いみたいだし、興味もなさそうなのに」

レインに疑問をぶつけてみる千冬…って、俺はスルーかよ！

レイン「それは、旅をして人間はあいつ等みたいなやつばっかりではないことが分かったからな」

キティ「こいつは旅先で世話になった人や家族、知り合いを守りたいんだとさ」

千冬「変わったな」

レインの変わりように驚く千冬…

ウェンディ「それだけ頑張ったんすよレインは」

茶々丸「嫌いなりに人を理解しようとしたのですよレインさんは」

今までの努力をしみじみ言思う茶々丸…

ウェンディ「近所の子供に泣かされたときは驚きましたけど…」

千冬「そうか、努力…ん？お前いまなんて言った？」

ウェンディの発言がその場の空気を換える…

茶々丸「近所の子供から、働けよ！とかニートとか言われて反論しながら泣いていましたね」

レイン「ちょ！何言ってんだよ！お前達は！」

レイン、キャラ崩壊疑惑発生！！

レイン「作者…ちょっと向こうでＯＨＡＮＡＳＩしに逝こうか？」

えっと。字が違いますよね？レインさんしかもＯＨＡＮＡＳＩって桃色の光線をふんだんに振り撒く魔王のセリフです…よぉぉぉぉぉぉぉぉぉ…

千冬「遅刻しているのだ！さっさと済ませろよ！」

え！助けてくれないの！

キティ「顔はまずいから腹な、腹」

何処のヤンキーですか！！

レイン「さて始末も終わったことだし行くか」

キティ「レインちょっと」

手招きをするキティ…

ペロ…

レイン「／／／」

キティ「奴の血が付い手たぞ？」

いきなりのことに困惑するレイン…

千冬「さぁ、行くぞ」

教室に移動するレインたち…

誰か助けて…ｂｙ作者

出会い（後書き）

感想お願いします

人物設定？（前書き）

名前の通り

人物設定？

レイン，Ａ，Ｋ，マクダウェル

性別；男性

年齢；約２０００歳位？

種族；吸血鬼（真祖）

身長；１７５．６ｃｍ

体重；６９．３

※身長は不死のため止まっているが、筋肉が付いたため体重増加

髪色；黒

瞳；黄色

※真祖の発同時紅になる

ＩＳ

名前；ウェンディ

タイプ；接近＆中距離

待機状態；手鏡＆人型で待機可能

色；待機時；銀

稼働時；黒

人型；なのはに出てくるウェンディ

武装；ブラッティ・クロウ（血の刃）

※真祖の能力の一つで自分の血を自由な硬さ、長さ、大きさにできる

チェイン・バインド（束縛の鎖）
ウェンディの武器
※背中のウィング・スラスターから出る黒い鎖、相手の行動を止める

ブラティーダガー（無限の刃）
※ウェンディ&レインの混合技で、背中のウィング・スラスターから無数の黒いナイフが飛んでくる（軌道変更可能）

???（???）
レインの感情が高まった時に強制的に発動

ワンオフ・アビリティ
道化師
鏡に映した相手のＩＳをコピーし自分オリジナルにできる
※一回移したデータは蓄積可能で、再度呼び出し可能

エヴァンジェリン，Ａ，Ｋ，マクダウェル

性別；女

年齢；１８歳

属性；吸血鬼（真祖）

身長；１５５．３

体重；５３．２

髪色；金

瞳；青

体系；バランスのとれたスタイル（ご想像にお任せいたします）

ＩＳ

名前；茶々丸

タイプ；中距離＆遠距離

待機状態；人型

※ネギま！の茶々丸そのもの

稼働時；黒

※レインのマントと同じ

武装

簡単に言いますとエヴァちゃんの魔法を弾丸やミサイルに閉じ込めただけです。

アブソリュート「凍る大地」

武器；弾丸

着弾と同時に相手の周りと相手自信を氷漬けにする

ジャッチメント「断罪の刃」

武器；パイルバンカー

唯一の接近戦武器

血で固められた赤い剣を両手の先に出現させる

マレウス・アクィローニス「氷神の戦鎚」

武器；サテライト

範囲に入っているすべてのものを氷漬けにする

１ゲリドゥ・カピリス「凍てつく氷棺」

２グラキアーリス

1、簡単に言うとゲートオブ・バビロンのミサイル版

2、武器；ミサイル

着弾と同時に着弾箇所を凍らせる

※1の発同時に発射可能

ワンオフ・アビリティ

闇の加速

身体能力を急激に上昇&消費した弾数の回復

人物設定？（後書き）

チートですね

あれは趣味ですか？（前書き）

やっと原作ルートに乗りました！

あと、総合ＰＶが５，１００を超えました！ありがとうございます。

今永作にお付き合いいただき誠に感謝しています

あれは趣味ですか？

視点を変えて再び教室へ…

千冬「お前達は私が呼ぶまで出てこなくていいからな」

レイン「分かった」

キティ「分かった」

千冬はそう言いって教室に入る…

……ゴッ……

千冬「ハァ…お前は真面に自己紹介も出来ずに、尚且つ先生を泣かすなんて…どんなへたれだ？」

一夏「げ！関羽！」

一夏よそれは言ってはいけない禁止ワードだぞ…ｂｙ作者

スパーン

ほらな…

千冬「誰が三国志の英雄だ！馬鹿者！」

二度あることは三度あるっていうよね？一夏さん？

叩かれた頭を抑えて悶えていた…

山田「あ！織斑先生、用事は終わったんですか？」

千冬の帰還に笑みがこぼれる山田先生…

千冬「ああ、山田君、クラスの挨拶を押し付けたことと、この馬鹿が泣かしてしまったことを謝ろう、済まなかったね」

一夏（…千冬姉がねぎらっているだと！…）

なんてことを考えている一夏に対して、ギロチンが振り下ろされる…

スパーン！

千冬「ねぎらいの心ぐらい、私にもあるさ…それと、織斑先生だ！」

一夏「何で、考えたことがすぐにわかるわけ！」

それ俺も聞きたかったな！

千冬「ふん、それ位誰にだってできるさ」

んなわけあるか！ｂｙ作者

そういえばやたらと静かだな？

一同「き、きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ…」

ソニックブームが一夏と箒を襲う…効果は抜群だぁぁぁ！

あれ怖いよね…窓にヒビ入ってるし…

A「千冬様よ！本物よ！」

B「私お姉さまに憧れて、この学園に来たんです北九州から！」

いや、別に南北海道でもいいけどさ…

C「お姉さまの指導いただけるなんて！」

D「お姉さま…ハァハァ／／／」

人気者ですね…あれ？変態が混じってる気がする…

千冬「まったく、毎年よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだな？感心させられる。それともなんか？私のクラスだけに集中させているのか？」

眉間に手を当てて、考え込む千冬に対して…

一同A「もっと、叱って！罵って！蔑んで！」

一同B「でも時には優しくして！」

D「お姉さまは私のものよ！」

うん、間違えでも気のせいでもないね…黒子的な人がいる…

クラスが元気そうで何よりですね千冬さん？

千冬「元気すぎるのお大変なんだがな…」

俺と会話している千冬に一夏が…

一夏「何独り言を言ってるんだよ千冬姉？」

千冬「織斑先生だ！」

ゴン…

今度は鉄拳が飛んできたそうです…

千冬「あ…入ってこい…」

完全に忘れていたよな？

千冬「おい、入ってもいいぞ！」

千冬の掛け声に反応すらしない…

がら…

千冬「おい！何を…」

今の状況説明、千冬がドアを開けた先には、二人がいるはずなのだが、その二人は気を失って倒れている…

千冬「どうしたというのだ（汗）」

今の状況に少し戸惑う千冬…

皆さんに言っておきます…吸血鬼って元をたどれば蝙蝠なんですよね。蝙蝠の聴覚ってとても優れているんですよ…ソニックブームの餌食になったようですね…

しばらくして…

千冬「少し問題があったが、こいつ等も新しいクラスメイトだ、自己紹介しろ！」

気絶から復帰した二人…

キティ「エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルだよろしく頼む」

茶々丸「絡繰茶々丸です。よろしくお願いいたします」

レイン「レイン・A・K・マクダウェル…」

レインに対して「それだけ？」「なんかあるでしょ？」的な視線が浴びせられる…

千冬「レインは人見知りでな、若干人目の多いとこは苦手なんだ」

珍しく助け舟を出す千冬…

レイン「ウェンディを紹介したほうがいいか？」

千冬「どっちでもいいぞ？」

レインが手鏡に触れた瞬間、教室が浸りに包まれる…

ウェンディ「久々の登場っす！皆、ウェンディっす！よろしく頼むっすよ！」

ウェンディの登場に沈まれかえる教室…

一同「き、きゃぁぁぁぁぁ」

本日二回目のソニックブームしかも一回目よりさらに強力…止めたげて、レイン達のライフポイントは０よ！

一夏と箒も机に突っ伏していた…

ここで、重要なことに気付く人が…

Ａ「先生！織斑くんとはどんな関係ですか？」

生徒の質問に答えるか迷ってると…

一夏「千冬…織斑先生とは兄弟だ」

一夏よ今の発言で軽く自分の首を絞めたことになるぞ…

クラス全体がどよめく…

「え、織斑君って、あの千冬様の弟なの？」

「せれじぁ、世界で唯一男でＩＳを使えるのっていうのも、それが関係して…」

「羨ましいですの！変わってもらいたいですの！」

最後のは無視ってことで…

千冬「残念だが、最初のＩＳ男操縦者はレインだ」

千冬の訂正に一同の視線がレインに注ぐ…

レイン「…そんなに見ないでくれ…」

半分照れているレインの横でキティの瞳から光が消える…

Ｂ「レインさんってエヴェンジェリンさんと兄弟なんですか？」

その質問にキティが…

キティ「夫婦だ！」

「「「……は？」」」

クラス一同に？が浮かぶ…

一瞬の静けさから一転…

「「「えぇ～～～～～」」」

三度ソニックブーム発生！！…教室壊れないかな？

キティが誇らしげに、貧ｎ…ゲフンゲフン

胸を張る…

クラスからは「そんな…」「もう、手遅れだなんて…」とか悲痛の叫びが聞こえる…

そのさなか、質問が…

C「先生！レインさんの拘束具って趣味ですか？」

その質問にクラス内から「ナイス質問だ！」「よく聞いた」とか聞こえてくる…

千冬「これは禁則事項だが…趣味ではないとだけ言っておこう」

答えないレインに対して千冬がフローを入れる…

そんなこんなで時間が流れて休み時間になった…

あれは趣味ですか？（後書き）

次は頑張ってセシリア戦に行きたいと思います

感想＆アドバイスお待ちしています

僕に助けは来ないのですね…（前書き）

セシリア戦いけませんでした…

僕に助けは来ないのですね…

休み時間…

一夏には質問の嵐、レインには視線の嵐にさらされていた…

箒「ちょっといいか？」

一夏「え？」

突然、話しかけられた女子同士の牽制に競り勝ったのだろうか？…いや、周りの女子たちがザワザワと「出遅れたか…」とか言っている、どうも一人思い切って行動に出たようだ。

一夏「……箒か？」

一夏の問いかけに無言で立っている女性は六年ぶりに再会する幼馴染だった。

篠ノ之箒。俺が通っていた道場の子。髪型は昔と変わらずポニーテイル。腰下までである黒い髪を結ったリボンが白なのは、やっぱり神主の娘だからであろうか？

身長は平均的な女子のそれなのだが、長年剣道で培った体はどこか長身を思わせる。少し不機嫌に見える目は生まれつきと本人いわく。…いや俺が嫌われている可能背もゼロではないけど…

一夏さん、嫉妬であるとは考えられないのですか？ｂｙ作者

箒「廊下でいいか？」

教室では話にくいことなのだろうか？まあ、いまの現状を打破できればなんでもいいのだが、俺が抜けることによってレインさんの視線がさらに強くなった気がする…レインさん耐えてください！と心の中で呟く一夏であった…レインを置き去りにした一夏は箒に後を追った…

一夏「そういえば」

箒「なんだ？」

ふと思い出したことがあって、俺から話を切りだした。というか箒、廊下まで移動させておいて自分から話しかけないっていうのは新鮮すぎだろ。

一夏「去年、剣道の全国大会優勝おめでとう」

箒「……」

俺の言葉に箒は口をへの字にして赤らめた。…え？何で怒ってんだ？褒めたのに。

照れてるって発想はないのですか？一夏さん…

箒「何でしているのだ」

一夏「何でって、新聞で見たし…」

箒「な、何で新聞なんか見ているのだっ」

何を言っているんだ、箒は。意味が解らない。新聞くらい好きに読ませろよ。あと、久しぶりに聞いたけど、口調がなんか男っぽいというか、侍みたいだな、相変わらず。

一夏「あ～、あと」

箒「な、何だ！？」

一夏「……」

箒「あ、いや……」

流石に自分の剣幕に気付いたのか、ばつが悪そうにする箒。しかし妙に興奮してるな。不思議な奴だ。

興奮してるのは貴方のせいですよｂｙ作者

不穏な空気が流れる…

一夏「ひ、久しぶり。六年ぶりだけど、箒ってすぐにわかったぞ」

箒「え…」

一夏の言葉に驚く箒…

一夏「ほら、髪型一緒だし」

そう言ってちょんちょんと自分の頭を指すと、箒は少し顔を赤らめて自分のポニーテイルをいじりだした。

箒「よく覚えているものだな…」

一夏「いや、忘れるわけないだろ、幼馴染のことくらい」

箒「……」

更に顔を赤らめてまた睨まれた…えー、何で？

キーンコーンカーンコーン。

おっと時間切れだ。早く席に戻らないと、出席簿くr…

スパーン…

千冬「とっとと、席に着け、織斑」

一夏「…ご、ご指導ありがとうございます」

俺の細胞は午前中だけで二万個死んだ。

山田「…で、あるからしてＩＳの基本的な運用には、現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したＩＳ運用を場合は、刑法によって場せられ…」

教科書の内容を淡々と話していく山田先生…

一夏「……」

レイン「……」

キティ「……」

ウェンディ「……」

上から、理解できない一夏、授業中だが爆睡をするレイン夫妻とウェンディ…

山田「ここまででわからないとこありますか？」

一夏「ヤバい、全然わからない…レインさんは…」

同類は居ないかとレインのほうに視線を向ける、当のレインは熟睡していた…そこで一夏のとった行動は…

一夏「先生…」

山田「何ですか？織斑君」

一夏「全部わかりません…」

素直に自分の弱さを吐露することだった…そうすれば大半は受け入れてくれるはずだ…

パパパーン！！

とてつもなく大きな音が三連発で聞こえた…その音のほうに視線を向けると、レイン達熟睡組が頭を押さえ悶え苦しんでいた…

一歩、また一歩と近づいてくる千冬…

千冬「…織斑、入学前の参考書は読んだか？」

とても素晴らしい笑みを見せているが皆さんお気づきだろうか…目が笑っていません…

一夏「…えっと…古い電話帳と間違えて捨てて…」

ゴッ！

出席簿の角が後頭部をクリティカルヒット！…絶対痛いな…

千冬「必読と書いてあっただろうが馬鹿者！」

また俺の脳内細胞が二万人は死んだな…

千冬「再発行してやるから一週間以内で覚えろ」

一夏「一週間は流石に…」

千冬「やれと言っている！」

一夏「…はい…」

まるで蛇に睨まれた蛙のように縮こまる一夏…

千冬「ＩＳは兵器だ！その機動性、攻撃力、制圧力は過去の兵器を遥かにしのぐものだ。そういった「兵器」深く知らずに扱えば必ず事件が起こる。そうしないための基礎知識と訓練だ。理解出来なくても覚えろ。そして守れ。規則とはそういうものだ。」

はい。正論です。
でも一つだけ言わせてもらうと、俺は希望してここに居るわけじゃない。
ある日黒服の男達がやってきて「肝を保護すろ」と言って、ＩＳ学園入学所を置いて行ったんだ。

千冬「…貴様、「自分がここに望んでいるわけではない」と思っ…」

そう言いかけて何時不は止まった…何故ならそのすぐ後ろで殺気を放っているレインに気が付いたからだ…

レイン「お前…自覚がないだろ…自分が兵器を動かせる事…俺は大人たちが勝手に決めてここに居る…そんな目をしているな…」

そう言い、一夏に近づいていくレイン…

レイン「甘ったれてんじゃねぇよ！」

レインのその一言に俯く事しかできない一夏…

レイン「さっき、千冬が言ったことは正しい…最近じゃ、スポーツとして、馴染んでいるＩＳだがな、少し前までは戦争で沢山の命を奪う兵器として使用されてたんだぞ！解るか？お前が動かしてしまった、それは兵器だ！ちゃんと今ある現実を割り切れ！」

そう言い放ち、自分の席に戻る際に…

レイン「だから人間は嫌いなんだ…」

聞こえないように呟くレインだった…

千冬「望む望まずに関係なく、人は集団の中で生きなくてはならない、それさえ放棄するのであれば、先ずは人であることをやめるのだな…」

何時までも現実から目をそむけないで、直視しろってことだよな…

ふぅ、やるしかないか。

千冬姉に恥をかかせないようにしなくちゃな…そう心に決意する一夏であった…

僕に助けは来ないのですね…（後書き）

感想＆アドバイスお待ちしています

クラス決議（前書き）

何とな頑張って知恵を絞りだしています…

フラグどうしようかな？

クラス決議

そんなこんなで休み時間…

??「ちょっと、よろしくって」

一夏「へ?」

二時間目の休み時間、いきなり声をかけられた一夏は素っ頓狂な声を出した…

話しかけてきた相手は、地血の金色が鮮やかな少女だった。白人特有の透き通ったブルーの瞳が、やや吊り上った状態で俺を見ている。わずかにロールがかかった髪はいかにも高貴なオーラを出していて、その女子の雰囲気も「いかにも」今の女性という感じだった。

今の世の中、ISせいで女性はかなり優遇されていう。優遇どころか、行き過ぎて「女=偉い」の構造になっている。そうなると男の立場は完全に奴隷、労働力だ。今所、男からのナンパは少なくなっているが、逆に町ですれ違った女性にパシリにされる男の姿が目立つようになった…

つまりそういう、いかにも現代の女性が目の前にいた。腰に当てた手が様になっているあたり、実際のところいい身分なのかもしれない。

ちなみに、IS学園では無条件で多国籍の生徒を受け入れなくてはいけないという義務のせいで、外国人の女子生徒なんて珍しくもない。むしろ、クラスの女性の半分がかろうじて日本人というわけだ。

??「聞いていますの？お返事は？」

一夏「あ、ああ。聞いてるけど…どういう要件だ？」

俺がそう答えると、身の前の女子はかなりわざとらしく声を上げた。

??「まぁ！なんですの、そのお返事は？私に声をかけれるだけでも光栄なのですから、それ相応の対応というものがあるのではないでしょうか？」

一夏「……」

正直、この手合いは苦手だ…

ＩＳを使える。それが国家の戦力になるからだ…さっき、俺がレインさんに言われた事を思い出す…

レイン「ＩＳは人に命を奪う兵器だ！」

だからと言って、それをいいことに自分の地位を上げるのは思うのだが…なんてことを一夏は考えていた…

一夏「悪いな。俺、君が誰だか知らないし」

実際に知らない。何せ自己紹介の時は山田先生に泣かれた事、千冬姉が担任だった事などの頭の整理で真面に聞いてられなかったしな…

一夏の一言が気に触ったのか若干怒りながら

？？「私を知らない？このセシリア・オルコットを？私は…」

キティ「イギリスの代表候補性だろ？」

セシリア「そうですの！イギリスの…ってあなたは確かマクダウェルさん？でしたよね？」

珍しく起きていたキティが答える…明日は雪かな？ｂｙ作者

キティ「何か言ったか？駄作者？」

な…んだと！聞こえただと…でも、駄作者はないんじゃないかい？

一夏「あの…質問いいか？」

セシリア「ふん。下々のものの要求にこたえるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

ま、まさかあれを言うのか？

一夏「代表候補性って、なんだ？」

がたたっ。聞き耳を立てていたクラスの女子（茶々丸とレイン以外）がずっこけた。

セシリア「あ、あ、あ…」

一夏「あ？」

セシリア「あなた本気で言っておっしゃっていますの！」

すごい剣幕だ…漫画だったら血管マークが出ていてもおかしくわないな。

誰のせいだと思っているので？

一夏「おう！知らない」

そんなに胸を張らなくても…威張る事じゃないですっせ一夏さん…

セシリア「……」

セシリアは怒りが一周して逆に冷静になったのか、頭が痛そうに感じでこめかみを押さえぶつぶつと呟いていた…

セシリア「信じられない…信じられないですわ…」

なんて言ってると…

レイン「無知とは恐ろしいものだな…」

レインさんいたんですか？

影薄いですよ？

レイン「一夏とか言ったな？」

一夏「そうだけど」

レインの急な問いに答える一夏

レイン「ここに居る金髪ロールのオルコットは代表候補生といって、

簡単に言うと野球とかでいう補欠選手だ…」

セシリア「そう、補t…って誰が補欠選所ですの！」

レインの解釈に焦るセシリア…

レイン「黙んな…補欠…所詮、今のまんまじゃどうあがいてもしばらくは補欠のまんまだぜ？」

一夏「何だ…そんなに対したことないんだな…」

少しがっかりする一夏に対して…

セシリア「何ですの！この扱いは！私は唯一試験で教師陣倒したのですよ！…いわば、エリートなんですのよ！」

自慢げに胸を張るセシリア…いったいどっちの自慢なんだか…あのキティさん？頼みますから足を思いっきり踏まないでくださいませんか？すっごく痛いです…

一夏「試験ってＩＳで試合したのか？」

セシリア「それ以外にありませんは」

一夏「それなら、俺も倒したぞ？」

セシリア「は？」

あまりの事に思考が止まるセシリア…

セシリア「私だけと聞きましたが…」

キティ「女の中で…という落ちではないのか？」

セシリア「そんな…納得がいきませんわ」

キーンコーンカーンコーン。

セシリア「また来ますわ」

チャイムを聞き席に戻るセシリア、キティ、レイン、

がら…

千冬「これより再来週行われるクラス対抗戦に出る代表を決めないといけないな」

ん？クラス代表？対抗戦？

そんな疑問が一夏の中に渦巻いているうちに…

A「織斑君を推薦します」

ん？俺以外に俺村がいるのか？それは奇遇だな。

B「私もそれが良いと思います」

だな、俺も俺以外ならだれでもいいぜ？

千冬「では，候補者は織斑一夏…他にはいないのか？自薦他薦は問

わないぞ」

マズイ…こうなればダメもとで…

一夏「俺はレインさんを推薦する」

ウェンディ「あ！僕もそれに賛成っす！」

一夏の言葉にクラス中がどよめく…

レイン「ん？なんだか騒がしいな…」

熟睡していたレインが起きて…スパーーン

目覚めの一撃を食らった…

レイン「お、おはよう、千冬…」

千冬「織斑先生だ…それと、お前がクラス代表に推薦せれてぞ？」

レイン「な！」

千冬の言葉に今の状況に理解するレイン…その間３秒

レイン「じゃぁ、キティを推薦する」

キティ「茶々丸何が起きたのだ？クラスが五月蠅い…」

スパーーーン

キティ「貴様！そう何回も叩くな！縮むだろうが！」

茶々丸「レインさまがマスターをダメもとでクラス代表者に推薦しました…」

キティ「な！私を巻き込むな！馬鹿かお前は！」

急なとばっちりを食らうキティをレインであった…

クラス決議（後書き）

次回！セシリア戦です。

感想＆アドバイスお待ちしています

対決？（前書き）

短いですがどうぞ

対決？

セシリア「決闘ですわ！」

バンッち机を叩くセシリア。ついでに手袋も投げて来るのだろうか？手袋していないけど…ていうかあの決闘の申し込みってイタリアだっけ？

「おう！良いぜ。四の五の言うよりわかりやすい」

「誰が坊や達の相手などするか」

「……」

みたいなことを言っている人は上から、一夏、キティ、レイン…は寝ているようだ、そろそろ起きないと…

スパーーン

ほらね…本日何度目かわからないくらい出席簿を食らうレイン…

何でこんな事になっているかというと…

事の発端は約３０分位に遡る…

キティ「な！私を巻き込むな！馬鹿かお前は！」

そんなやり取りをしているキティ達をよそに…

一夏「ちょっ、ちょっと待った！俺はそんなのやらｎ…」

千冬「自薦他薦は問わないにといった。他薦されたものに拒否権はない。選ばれた以上覚悟をしろ、もちろんお前達もだぞ」

「いや、でも…」

「わ、私もか！」

「めんどくせぇ」

上から、一夏、キティ、レインの順で発言しましたとさ…

セシリア「ちょっと待ってください！納得がいきませんわ！」

バン！と机をたたいて発言したのはセ、セシ…金髪ロールさんだった…名前思い出すの諦めたよ一夏の奴…ｂｙ作者

セシリア「どうして実力ナンバー１の私の名前が出ないのですの！大体男がクラス代表なんていい恥さらしですわ！私に、セシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間も味わえとおっしゃいますの！」

そうだ！オルコットさんだ、良いぞ！もっと言ってやれ！…ん？

セシリア「実力からいえば私がクラス代表になるのは必然！それを物珍しいからという理由で極東のサルにされては困ります！私はこのような島国まで来てＩＳの技術を修練に来てのであって、体を鎖で巻かれている変態や、人形と一緒に学校に来るお子様などと一緒にサーカスの一員になｒ…」

レイン「おーい！人形や変態云々は俺たちの事か？」

セシリア「あなたたち以外に誰がいるのですか？」

話の腰を折られて若干機嫌が悪いセシリアは睨みらながら言った…

レイン「そうかそうか、俺たちの事か…お前俺のキティや家族のことを馬鹿にしたな？」

決して、決して笑っていない目で訴えるレイン…

レイン「千冬…」

そのままの顔で千冬のほうを見る…

千冬「！…なんだ？」

急な呼びかけに驚く千冬…

レイン「俺が何で鎖に巻かれているか…知りたそうなが奴がいるみたいなんだけどさぁ…とっていいかな？」

怒ってるよ…完璧に切れているよ…

千冬「ダメに決まっているだろ！」

即答する千冬であった…だってそうでしょ？真祖の殺気なんか某ゴム人間が出せるようになった覇気なんかと同じかそれ以上だよ…by作者

セシリア「あなたの様な変態に付き合っている暇はありませんの！大体、文化として後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、私にとっては大耐え難い苦痛で…」

カチン
ブチ！

ん？なんか切れる音がしなかった？

一夏「イギリスだって大したお国自慢ないだろ。世界一マズイ料理で何年覇者だよ」

レイン「餓鬼が粋がってんじゃねぇぞ！」

セシリア「な！…」

つい口が滑ってしまった一夏であった。レインは絶賛切れてます！

（ウェンディ何とかし…寝てるし！手かこの状況で寝れるとかどんな神経してるんだよｂｙ作者）

ウェンディ「照れるっすよ…」

いや、褒めてねぇし…

セシリア「あ、あ、貴方ねぇ！私の祖国を愚弄しますの！」

一夏「先に愚弄したのはおまえだろ？」

レイン「先に喧嘩吹っかけてきたのはそっちだろ？」

セシリア「決闘ですわ！」

セシリアは顔を真っ赤にして机をバンッ！と叩き宣言した…

一夏「おぅ！良いぜ四の五の言うより解りやすい」

レイン「餓鬼の相手はつかれるがその勝負のった！」

キティ「めんどくさい…」

流れに任せているのか解りませんが、決闘に承諾する？レインたち…

一夏「ハンデはどれくらいつける？」

レイン「手加減はどれくらいだ？」

セシリア「あら。早速お願いですの？」

一夏「いや、俺が…俺らがそれくらいつければいいかなと？」

クラスが笑いの渦に包まれた…

A「お、織斑君達、それ本気？男が女より強かったのって大昔の話だよ？」

B「織斑君達はＩＳを使えるかも知れないけど、それは言いすぎだよ」

しまった、てきな顔をする一夏であった…

一夏「ハンデは…」

そう言いかけた一夏であったが…

レイン「千冬、俺達はハンデがいるだろ？」

セシリア「私より弱いと認めるのは素直でよろしいことですわ！」

レインの発言の意味を理解していないセシリア…

千冬「そうだな…ハンデがいるな、セシリア、織斑、どれ位レインとエヴァにハンデつけてほしい？」

セシリア「な！何故ですの！私がハンデなどつけてもらう必要ありませんわ！」

一夏「俺もいらない」

千冬「レインとキティの実力が解らないみたいだから教えておくが、こいつ等は二人でルーマニア代表と勤めているぞ？」

セシリア「な！こんな変態と幼女が代表ですの！」

それは禁句！

キティ「誰が幼女だ！付け加えておくが私たちは千冬に勝っている」

その言葉にクラス中が静まる…

「え、うそでしょ？」
「お姉さまが負けるわけないですよね？」
そんな言葉が出始める…
千冬「エヴァが言っていることは本当だ、実力は私が保証する」
レイン「俺の鎖は力を抑えるためにある、決して、決して趣味なんかじゃないから」
千冬「それでもう一度聞くがハンデはいるか？」
セシリア「要りませんわ…」
一夏「要らないです」

対決？（後書き）

感想お待ちしています

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1025y/

親愛なる真祖様へ

2011年11月22日02時56分発行